

度みて

大東亞戰役陣病歿勇士の英靈
を弔し

歳末年始の禮を缺く

南無妙法蓮華經

皇紀二千六百〇二年壬午元旦

財團 統 一 團
法人

幹部 一同

念 告

左記の通り本部に於て新年國禱會完勝
祈願並に慰靈祭相營可申候間奮つて御
參列相成度候

左 記

日時 一月七日午後二時開會

行事 勤 修

來賓感話

懇談會

會 費 金五拾錢也

以 上

財團 統 一 團
法人

○元旦午前九時、元朝會。

○一月六日より三十日間、毎朝六時十五分、立正寒修
行會。

妙法蓮華經開結御持參の事、但便宜上本部にも用意有之

次 目

三教の特色と其調和(中).....	本 多 日 生
本尊問題に就て.....	小 林 一 郎
本佛實在の宗教哲學(八).....	河 合 陟 明
記 事	

○本部圖報 ○産報會記 ○入帳報告

號 月 二 年 七 十 四 第

統

財團

人團

統 一 團

發 行

財團 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ護妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、毅然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

第一佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ莫大ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方チ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五百圓以上ヲ寄附セラル、方チ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ匯出セラル方チ正團員トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ、適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方チ誌友トス

三教の特色と其調和 (中)

二、神道の特色

そこで神道の特色を稽へると、これは只今申す純神道であつて、瑕のない我が皇祖皇宗のお定めなすつた道である。神道といふよりは寧ろ皇道と云つた方が宜いかも知れぬが、昔から神道と云つて來たから神道と云つて置きますが、併しこれは宗教が表ではないのである、神道と云つたら世俗は直ぐにチャラン／＼と鈴を振つて手を叩く天理教のやうなものだと思ふが、彼等は教會神道であつて宗教化した低級なるものである。純神道は教育勅語に「斯ノ道は皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所」とお示しになつて居る斯の道、それが本當の神道である。だから神道といふよりは皇道と云つた方が宜いと思ふ、惟神の道即ち斯の道は皇祖皇宗の遺訓であつて古今に通じて謬らざる所のものである、天理教とか蓮門教とかいふやうなのは俗神道と云つて宗教化したもので、低級なるものである。それから又氏神の中にも混合して居るから頸別しなければならぬ。神田明神が今はどういふ

本多日生

神様を祀つてあるか知らぬけれども、元は將門を祀つた。鳥越明神は將門の首を祀つた。將門は日本の歴史から見て逆賊である、書いたものを調べて御覽なさい、あれは自分で天子様にならうとして色々やつたが、依藤太に射られて殺されてしまつた。さういふ風な逆賊などを神様にしたといふやうな氏神がある、或は神體の譯の分らぬものが澤山あるが、それは間違である。そこで神道の特色といふのは、

(イ) 建國の事實 である。日本の國がどういふ風に創まつたかといふ國家の成立が此の皇祖皇宗の遺訓から傳はつて來て居るのである、宗教のことではない、國の事である。教育勅語にある「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」といふ彼處が即ち純神道の最も大切な所であります。さうするとこれは皆さん御承知の通りに天御中主神様・國常立神様・伊弉那岐・伊弉那美神様を通して天照大御神に至つて日本國が成立つて神武天皇に至り、それより今上天皇に傳はつて來たといふ此の皇祖皇宗、而して其皇祖皇宗の御子孫天津日嗣の御裔が萬世一系の天皇として傳はつて居る、そこに神様は國を建てられたといふことに就て建國の事情といふものがある。これは神話として傳はつたものであるから科學的研究に於ては色々疑問が起つて居るが、吾々大和民族は長い歴史を通して此神話を信じて來た。今更之を科學的研究に移して彼れ此れ言ふべきものではない、國民の信念を固めて來た所の神様によつて日本の國が開かれたといふ建國の事實、彼處に書いてある事は科學から見ては首肯出來ないかも知れない、國常立神様が天璽矛を以て滄溟を探つた滴が落ちて、これが濃能基呂島になつたといふことは一つの神話として考へられて宜いのであるけれども、其等の神話といふものは、其中に動かない國民の信念といふものがあるのである。猿蟹合戦見たやうなものであつて、其話はお伽噺として作られて居るけれども、其中を縫うて行く一種の觀念といふものは變へることの出來ないものである。それは外側がお伽噺のやうであるから中味も棄て、しまへといふのではないかぬ、外は棄て、も中の饅頭は食はなければならぬ、それが神話に對する觀念である。それを神話をまるきり食はうといふのは竹の皮まで食はなければ濟まぬと云つて竹の皮まで食ふと同じで、神話を侮辱して居るものである、一切を棄てるのは竹の皮を棄てると共に饅頭も棄てると同じで、何も食へない、馬鹿者のやることである。學問をする者は神話に對してはさういふ態度を執らなければならぬ、殊に日本國民は神話によつて成立つて居る國民であるけれども、神話に對する態度を知らぬ先生が學校の先生などに澤山あるが、實に馬鹿氣話であります。そんなことで何の話も出來るものぢやない、日本人は一人前になるには神話に對する態度といふことを心得ずして唯驀直に日本の建國の事實、それが皆其通りありし事のやうに思うて一切を受込んで行かうとすれば、他の場合に科學的の知識を研究すると頭の中で調和しない、初めに竹の皮まで食はうとして居るから、竹の皮が食へないとすると、竹の皮と饅頭と一緒にして棄てることになる、學校を卒業すると棄てる、棄てないやうな顔をして棄

て居る。竹の皮を棄てるには斯うする、饅頭を食ふには斯ういふやうにするといふ位なことは教へて置かなければならぬ、其意味に於て吾々日蓮主義者は我が建國の意義を慶讃し奉つて居る。坊さんのえらいのは表も裏も知つて居る、竹の皮と饅頭ぐらゐのことは皆知つて居る、そんなことを知らないではお経の一百も講釋することは出来ない、今の學者のやうに唯純粹の科學の知識に囚はれ、或は何もかも盲信して事實として受入れようとする、そんな輕卒なことでは佛教などいふことは少しも解らない。どつちかといへば日本建國史のことなどでも佛教の書方に倣つて、あゝいふ思想が後ろにあつて建國史を彩つたものといふ方が學問的には本當かも知れない。あゝいふ建國史の講釋は坊さんに聽かなければ分らぬといふことになる、聖德太子はさういふことを言つて居られる、『佛教は神史の玄義を釋く』、神史——神の歴史といふのは建國史である、日本の歴史の初めの所は神様で、神史の玄幽と云つて深々しい所は坊さんに話させるが宜い、昔から坊さんがやつて居つたのであるが、途中からヘツボコな學者に此話を渡した爲に間違ひが起つて來た。何れにしても今言ふ如くに其建國の事實も歴史に書かれて居ることも、其精神といふものは之を尊んで行かなければならぬ、其精神の一番大事なものは何かと云へば、即ち神勅にある所の此の日本の國は天壤と窮りなく續いて行く、さうしてそれは天津日嗣の御裔を戴いて行くことによつて隆えて行く、萬世一系の 天皇を戴いて天壤と窮りなく隆えて行く、而してそこに正しい精神と強い精神とを養つて行くのである。斯ういふことが建國の

史實の中に於て最も大事な事になつて居る。則ち此皇統を戴くといふことは、これは國民一般の思想で、それに就ての善惡などを國民は決して論究しない、佛教徒がお釋迦様に對して絶対の信仰を捧ぐるが如くに、日本國民は皇祖皇宗に對し、又御子孫に對して絶対の信頼を捧げてゐるといふことが前提となつて居つて、これは議論を許さない、問題とする所でないのである、絶対のものである。太陽は明るいか明るくないかといふことは問題にする必要はない、『太陽は明るいもの』それで宜い。どうしてといふやうなことを言ふ必要はない、皇室の尊いといふことは、これは日本の歴史が定め成したものであるから、何故にといふやうなさういふことを言ふ必要がない、説明すれば澤山理由は出て來るけれども、説明を俟つて尊いのではない、説明を超越してそこが神聖不可侵の皇室となつて居る、それが即ち建國の事實である。そこからそれに附隨した所の大事な善い事が澤山ありますが、今一々述べて居る暇がないからそれは略しまして、此の國體の由來、建國の事實といふものは、これは佛教から學ぶこともなければ佛教から聽くこともない、況んや西洋から學ぶべきことでは勿論ない。唯日本の惟神の教に於て建國の事實といふものを了解して行かなければならぬ、キリスト教が何んと言つたとか、西洋の學問では何んと言つたとかいつて、他所で言つたことで動くべきものではないのである。第二は、

(口) 包容の靈教 であります。即ち洵に簡單にして而も總てを受入れて行つて、次第々々に大き

くなるやうな教が立てられて居る。日本の神様は澤山なことをお示しなさらない、又書物もない、言ことせぬ國と申して面倒な理窟を担かね廻まわして説明しない、簡單なる事實を以て示されるので、それ故に三つの品物をお傳へになつて居る。鏡と玉と劔、之を大事にする、中に於ても鏡が最も大切である、之によつて一切の事を考へて宜いといふことである。だから其考へ方は後の人が段々研究をして、それには多少の議論はあるけれども、併ながら大體誰が考へても鏡といふものは物を間違へず映すといふことが本性である、何でも映す、白い物でも黒い物でも長い物でも短い物でも何でも映す、而して捻ひねぢけた物は捻ぢけた姿に、汚よごされた物は汚れた有様にちやんと見定めをつける、顔に墨が附いて居れば墨が附いた儘に、寝呆ねぼけて居れば寝呆けた儘に映す、見つともないと云つて小言は言はないけれども、其過を直さす力がある。あなた方は皆家を出る時分に鏡を一遍見る、どんな顔をして居るか鏡を見て安心する、さういふ風に人々をして自分を直し正しうさせる、鏡は面倒な講釋は言はぬけれども、是は少し顔が汚れて居るとか髪が亂れて居るとか、此儘ではいけぬといふやうな判断をさす、洵に鏡といふものは何も言はないけれども無限の教訓を與へる、此間斯このまういふ髪に結つて見た所が非常に顔の容かたちが良く見える、此處の所を斯このまうしようといふやうに段々智慧が附いて行く、それが包容の靈教といふものである。日本の教は支那の文明が來れば之を受入れて洗練し、印度の文明が來れば之を受入れて洗練し、西洋の文明が來ればやはり之を受入れて洗練し、善きを採り惡きを棄て、益々其國の文明

を豊富にして行く、これが日本の神様の思召である、佛教は印度から來たからそんなものは神様は嫌ひだ、佛様の息いきを止めてしまへといつて神官が騒さわいだ奴がある。神様は坊主などは嫌ひだ鹽を振れ鹽を振れ、さういふ思想が維新以來起つて、今も坊さんは穢けがれた者見たやうに考へて居る人がある。それは神道によつて欺たぶされた思想である、何も坊さんが穢けがれて居るなどいふことのあるべきものでない、宗教家を左様な意味に於て扱ふのは野蠻國である、世界各国に宗教家を穢けがれて居る、宗教家が宗教服を被かて居るのを以て鹽を振れなどいふのは氣狂ひの隣でなければ言ふ者はない、日本にはそんなことを言ふ奴がある。或る國家の大禮に付ても法服を着ては縁起が惡いから洋服を着て出て呉れと云つた官吏がある、それ位馬鹿が日本に出來て居る。大抵の家庭で元日坊さんが法服を着て行つたならば、今日だけは遠慮して貰ひたいといふ、坊さんの服を何と思つて居るか、坊さんが葬式に法服を着けるものだと思ふことは何處から間違つて來たか、これは決して坊さんの方から言ひ出したものではない、世間の間違に違ひない、坊さんが此服は縁起が惡いといふ者は一人もない。惟神の教はそんなケチな、佛教を左様なことを言つて罵ののつたり、儒教を排斥したりするやうな狹隘固陋なヒステリックのやうなものが、日本の惟神の精神ぢやない、其反對である。そこに神官等が神様の思召に背いて居ることが分る、彼等はヒステリックになつて居る、日本の神様は善きを取り、惡きを捨てる包容的の頭であるが、それに背いた固陋な考かんがひが凝り固まつてヒステリックな鐵挺頭てつていとうになつて頑冥な婆アさん

のやうになつて居る。これが解らぬやうな者はアンボン丹である、此くらゐのことが解らぬでは國家の前途が思ひやられる。思想文明は善きを取り惡きを捨て、廢むべきは廢め、受入れるべきは受入れて、堂々と發展して行かなければ、世界列強の競争の激烈なる今日に於て國家を維持することは出来ない、前のやうな鎖國の時代には、そんな固陋なことを言つて居つても國は保てたけれども、是れからさういふやうなことを言つて居つたら國家にどの位な過を起すかも分らぬ、實に大事事である。

そこで其包容の靈教といふことを唱へたのは、聖徳太子であります。守屋の方が神様の思召によつて佛教を排斥したといふけれども、神様の思召でない、どつちが本當かそれでは神の思召を確かめて見ようといふことになつて、戦になつた所が、守屋は矢に射られて死んだ、其矢が中つたことは日本の神様の思召でなかつたといふ證據である、だから今日のやうな狹隘な頭の神官は皆矢に中る。此間芝居を見に行くと悪い老爺が彼れ此れ言つて船に乗つて居ると、何處からか知らぬが白羽の矢が飛んで来てビューツと中つた、あゝいふやうに日本の神様から出る白箭がさういふ間違つた者の胸板に突中らなければならぬ。日蓮聖人が今日お居でになつたならば私の言ふやうなことを言はれるに違ひない。日本の神は正しきを愛し、又日本の前途をお守りなさる爲に、そんな狹隘固陋な國家を危くすることを考へて居る者の胸板には白羽の矢が中る、さう心得て行くのが惟神の精神である。あの頑固にして狹隘なる境域に立籠つてそれで神道を守つて居るといふのは、實に神道を禍ひして居るもので、彼等

は則ち神の罪人であると申して間違ひないのである。次にもう一つ大事な事は、

(八) 國體の尊嚴 である。これは日本の國の立前がどうなつて居るかといふことである、此國體は先に言ふ皇祖皇宗より傳はつて萬世一系の 天皇を戴くが、それが唯 天皇を戴くといふだけぢやない、其の 天子様のお持ちになつて居る御盛徳といふもの、其の 天皇陛下の内面に續かれて居る所の尊嚴なる御徳といふもの、廣大無邊といふことが尊嚴である。國體といへば其儘 天皇陛下ではないけれども、國體を表現せられて居るものが 天皇陛下である。宇宙の妙法が釋尊によつて人格化されて體現されて居るが如くに、我國の國體は 天皇によつて表現され體現されて居る所のものであるから、 天皇陛下の御一身はたゞの御方ではないのである、日本の國體の持つて來て居る所の尊嚴を總て人格の上にお備へなまつて居る、日本の國體が持つて居る所の尊嚴といふのはどういふことかといへば、これは天地宇宙の間に在るところの天地正大の氣と申すか、天地の俊徳と申すか、何とも言ひ様のない尊いものが、それが凝つて日本の國體が出来て居る、恰度天地宇宙の尊さが妙法と名けられて、それが實相的に云へば一念三千の法門となり、人格的に云へば本佛釋迦如來と現はれてござる如くに、日本の國體を非人格的に云へば宇宙の精神天地の俊徳と申すので、之を人格的に云へば萬世一系の皇統、其尊嚴神聖と申上げて居る、一つのものである、離して考へる間は間違つて居る。法華經の研究でもお釋迦様を離して一念三千が上だとか、實相が上だとか云つた非人格的のものが頭に

あつて、人格の釋尊を蔑にして居る間は間違である。我が國體に於ても、天皇を軽く見て、其以外に國體があり、或は天地の正氣があると考へた時には間違つて居る、一つになつて人格化されてそこに表現され、體現されて居るのである。其のことを日本人は知つて居らなければならぬ。だから、天子様御自身は體が小さくあらせられようが、時に御病氣があらせられようが、それだけを見てはならぬ、それだけが、天子様ではない、其内面の包含されて居る御盛徳といふものを見る。やはりお釋迦様は小さいとか、軽いとか、阿彌陀さんの方が上だとか、大日如來が上だとかみたのがいかぬと日蓮聖人が言はれた如くに、天子様の容言に現はれて居る表面だけを見て、絶對の内容の尊さを信頼しないといふことは國民の態度ではない。斯ういふことを教へるにはどうしても佛敎的觀念が必要である、世間の小理窟の頭では分らない、明治天皇はおえらかつたけれども、他の天皇はそれ程でなかつたやうに思ふたり、表面に表はれて居る所で、天子様がえらくなつたり、えらくならなかつたりするものではない。明治天皇にしても、明治天皇のそこに現はれてお働きになつたわけが、明治天皇ではない、其の裏面の更に、大なる無限なる御盛徳を吾々は仰がなければならぬ。それで若し小さいお子様が、天子に御成りになつても、十歳か十二三歳の御方が、天子様にお成りになつても、天子様になられたそこに絶對といふものを見なければならぬ。其思想を教えて置かないと、其時々々の天子様のことだけを量つて色々申す馬鹿がある。それを又其儘外部から辯明せんとする、馬鹿と馬鹿の鉢合せである。そんなことで日本の思想が維持せらるゝものぢやない。能く色々なことを小さい聲で女學生などでも話をする、——それが馬鹿といふものだ。お釋迦様に就ても、外部の事に付て少しのことがあるとそれを以て非難する。お釋迦様でも女の傍へ行つたらどんな顔をなさるだらうといつて外道婆羅門の奴が譏言する、或る時婆羅門の娘がお腹の中へお盆を入れてお腹を大きくして、お釋迦様が説教をしてござる所へ行つて、あなたそんなえらうなことを仰つしやつて此お腹をどうして下さると云つたので、聽衆の馬鹿な奴はお釋迦様はえらうなことを言つて居つても、内實は素らなことをしてゐてあの女の腹を膨らましたのか、あんな人は信するに足らぬと云つて立ちかけた。所がそこが佛敎は神祕的に書いてある、娘のお腹に鼠がコソ／＼と這上つて——鼠がお腹へ這上つたといふのもおかしいけれども、お盆を括り付けて居つた糸を咬切つたといふ話がある。そんな下手なことを言はぬでも娘が氣張つた爲に糸が切れたといへば宜いのに、鼠が這上つて糸を喰切つたのでお盆がドサリと落ちた。それを見てそりやどうもひどい、娘が嘘を突いたのかと云つて、お釋迦様を有難がつて掌を合したといふ。そんなことによつて有難くなつたり有難くなくなつたりすることは間違つたことである、物といふものはそこが大事であります。今の日本の教育の仕方が神經的のヘツボユな仕方であるから、僅かな事によつて人間がえらく見られたり、詰らなく見られたりするのは、多大な危険が伴ふことである、さういふことは深い考のある人にもつと能く聽かなければいかぬ。世俗は馬鹿が

多い、馬鹿の言ふ間違つたことに誤られてはならぬ。國體の尊嚴といふことは、唯外部のことを言ふのぢやない、お釋迦様に就て云へば久遠無始以來澤山佛があつても、今此處に現はれてござるお釋迦様に一切の徳を止めるので、歴代の 天皇の御盛徳、天照大御神より又其の宇宙の正大の氣より一切を今上陛下の御身の上に止める。だから絶大といふことが有難くなつて來る、さう心得るのが國體を了解する一番大事なことである。今一つは、

(二) 國民精神 である。これは長き歴史を傳うて日本人の間に養はれた最も善良なる精神を申すのである。何處の國にも長い歴史によつて養はれた美點といふものがありますが、日本は日本で建國以來色々立派な精神が養はれて居る、それは一つは氣候の好い國でもあるし、風景の佳い國でもあるし、皇室を戴いて居るし、善き教があるし、其間にえらい人が澤山出た歴史の感化がある。色々の良い事が寄集つて日本國民精神が歴史的に美點を有するのである、これは日本人の特色として考へなければならぬ。簡単に云へば大和魂といふ。日本人の尊さとしてそれは儒教が造つたにせよ、佛教が造つたにせよ、もうこつちのものである。それは儒教の精神・佛教の精神といふものぢやない、日本國民精神である。其の日本國民精神の良い所を研究する、悪い所も研究しなければならぬけれども先へ良い所を研究する、悪い方から物を見て行つたならば採るものは一つもない、どの人間でも何處が悪いかと言つて悪い所ばかり探して行つたならば、あの人は立派な人だ何處も悪い所はないといふやう

な人でも、悪い所だけが目に止まつて、良い所は見付からぬ。悪い所ばかり研究してスツカリ忌やになつた時分に、今度は良い所を研究しようと思つても良い所が分らない、馬鹿の研究は悪い所からやる、下等な人間は必ず隣の嫁が來ても、今度の嫁は髪が悪い貸衣装だつたな、斯ういふことを言つて人夜は大變宜い着物を着て居つたけれど、今朝は服装が悪い貸衣装だつたな、斯ういふことを言つて人を侮辱する、缺點を探しては批評する。それが少し地位の高い中流以上の所で其近所に結婚でもあつたならば、あの今度お出でになつたのは學校の成績が大變宜かつたさうだとか、學校卒業後も色々な藝をお習ひになつたさうだとかいふやうなことを言つて、お前も亦お嫁に行かにならぬからして意つてはいかぬといふ風に云ふ、斯ういふやうに善良な方を取つて行かなければならぬもので、それが大事な事である。何處までも國民精神といふもの、美點は發揮しなければならぬ、日本人がお互に知合ふに就ては彼奴が此奴がといふことではいかぬ。日本人が歴史に現はれて居る美點を知り、現在持つて居る美點を知るやう互に尊敬を交換して、其次に悪いものも考へて判断して行く、其國民精神の重んずべきを教へたものが惟神の道の大事な點である。日本人の自尊心——俺は日本人なり、斯ういふのである、俺は日本人なり、そんなことを言はないでも分つて居る、分つて居るが、日本人であるぞといふ強い信念をそこに持つのである。先づ斯ういふ事柄は儒教や、坊さんや、西洋の學者に聽かないでも宜しいのである、日本人同志がちやんと心得て居るべきことである。(次續)

本尊問題に就て

小林 一郎

近頃いろ／＼な事情から佛教に對して一種の迫害とも見られるやうなことが様々あります。殊に日蓮聖人の教義を奉ずる者に取つてはなか／＼容易ならぬ問題が起つて参りました。御承知のやうに御本尊の中に天照大神、八幡大菩薩といふお二方のお名前がありますが、これはどうも怪しからぬ、佛様のお名前が上の方にあつて、神様のお名前が下の方にあるといふことは、日本人として日本の神様を侮辱するものであるといふやうな攻撃が随分あります。此等の専門のことに就ては無論宗教局などの連中でも本當にわかりはしないやうですけれども、併しこれが問題になつては厄介だといふやうなことで、殊に議會などの問題にならない前に日蓮聖人の教義を奉ずる人達が自發的に、御本尊の中から、天照、八幡のお二方のお名前を除いた方が宜くはないかといふやうなことを、文部省の宗教局から日蓮宗各派の代表とも見られる人々を呼んで懇談したさうであります。これは理窟ではな

い。理窟なら幾らでもあるけれども、理窟ではない。まあ理窟を言はないで、事を穩便にといふやうな態度であつたので、理窟を言ふべき所も言はないで歸つたさうです。何れそれ／＼各宗の管長から達しがあるでせうが、恐らくは御本尊から此の二柱の神様のお名前は除かなければならぬといふやうな運命になるだらうといふこととあります。これは吾々日蓮聖人の教義を奉ずる者としては大問題で、祖師が自らお書きになつたものを後の世の者が恣に變更するといふやうなことは實に怪しからぬことであつて、信仰する者の立場としてさういふことは許されない譯であります。併しながら國の法律で取締るといふことになれば、國民として之に反抗することは出来ないとはいふやうな譯で、まあどうも時節を待つより外はないといふやうな説もあるやうであります。

明治の初めにも斯ういふことがありました。何でも太政官から達しがあつて、神佛の混淆は相成らぬ、御本尊輕んずるものだといふ考へは根本から間違つて居ります此の誤解が除かれぬ間は、この問題はいつ迄も引掛つて居るのであります。日本の神様は一體どういふ方であるかといへば、これは國學の大家本居宣長が何より明かに言つて居る。神とは上つ代の方である。上つ代とは昔のことである。天照大神を始め皆昔の方である。昔の方で殊にお徳が優れて居らつしやつたから、吾々が之を神と言ふのであつて、神と人とは異ふものでないといふことを、本居宣長の日本紀の解釋の中にハッキリと言つてあります。それだから神様がお聞きになつた國であるといふことは、人間以外の方がお聞きになつたといふことではない。皇室の御先祖がお聞きになつたので、皇室の御先祖は勿論人間で居らつしやつた、さうして最も徳の高い方であつた。その神様がお聞きになつたのだといふのでありますから、日本人として神様を輕んずるなどといふものは一人もあるべきではない。そんなことを疑ふのが全く間違つて居るのであります。

の中に佛様と神様と列んで居ることはいかぬといふので明治の初めには御本尊の中から天照・八幡のお名前は除かなければならぬといふことが申し渡されました。それで身延の貫首であつた新居日蓮とか、或はその他の人も皆、今見ますとあの二柱の神様のお名前を除いた本尊を誓いて居ります。甚しいのになると千葉縣の方などではあのお名前を切取つたといふやうな亂暴な話もあります。今度もさういふことが再び繰返されることになつたやうであります。併しこれはどうも一時的の事柄であつて、本當に佛敎と日本國との關係がわかれば、そんなやうな愚かな問題は無くなることであらうと思はれるのであります。畢竟これは一時のことでありませうから、深く氣に留めるにも及ばぬやうなものであります。併し私共佛敎を奉ずる者としては、斯ういふ際に、佛敎と日本の國との關係を根本的に深く考へて置く必要がある。決して政府と喧嘩をするには及ばないけれども、シツカリと自分達の覺悟を極めて置く必要があらうと思ふのであります。斯んなことは皆さん疾うに御承知のことと、何も私から改めて申上げることもないけれども、今日は斯ういふことを取纏めて、私はどう思つて居るかといふことを一通り申上げて見たいと思ひます。

一體佛敎を奉ずるに就て、佛様を拜めば日本の神様を

又神社に詣つてお辭儀をするといふことは、決して神様に自分達の日常生活に助けを與へて下さいといつてお願ひ申上げるのではないので、これは感謝の心持を表はすのであります。神様といふ方の中には、皇室の御先祖もあれば、或は國の爲に力を盡した和氣清麻呂、藤

原鎌足、楠木正成といふやうな人々をも祀つてある。斯ういふ方々のお蔭で日本は盛になつて、今日のやうな發展をしたのだから、日本國民としては斯ういふ方々に感謝を表するといふ意味で神社に禮拜するのでありまして神社に對して福を祈るといふことは、神社本来の性質として許されないことでもあります。今では多くの人が福を祈る爲に神詣りをするけれども、神社本来の性質としては、感謝を捧げることを主としなければならぬ譯である。又感謝を捧げて禮拜することが、自然に精神的に大きな感化を受けるといふことは無論の義であります。併し神社に行つて金の儲かることを頼むとか、商賣の繁昌を頼むといふことは、これは途方もない話で、神を崇めるといふことの意味とは全く違ふことでもあります。それでありますから苟くも日本人であるならば神社を敬ひ、神社の前を通つたら帽子を脱つて頭を低げて通る。又神様のことは心を正しうして考へるといふのが當然のことでありまして、日本人として斯ういふことを疑ふ者があるのは寧ろ不思議であります。それであるから縦ひ佛教を信じたからといつて、神様を輕んずるとか、神様を蔑ろにするとかいふやうなことがあるべき筈はない。そんなことを考へるのは抑々間違ひであります。

ところが徳川時代になると、随分佛教の方にも間違つ

徒であるからといつて、神様の前を帽子を冠つて通るといふやうなことをしてはならぬ。吾々は日本の國民だから、此の國の今日までの發展に功勞のあつた方——皇室の御先祖は勿論であります。縦ひ臣下であらうとも功勞のあつた人に感謝するといふ念は持つて居なければならぬ。そこをハツキリと別けなければならぬ。敬ふといふことと頼むといふことを混じてはならない。之を混じたから斯んな變な事になつて來て居るのであります。

こゝの所は神道の人達にも能くわかつて貰ひたいのであります。徳川時代に一時そんな間違ひがあつたが、これは一時的のことであつて、私共は佛教を信じて居るが神様を輕んずるといふことは決してしないのだといふことは能くわかつて貰ひたいと思ふのであります。ところが今佛教排斥を口にして居る人々は、斯ういふことがわからぬものであるから、何でも構はず佛教を排斥してしまはうといふ考への人も随分あるやうであります。これは又向ふが間違つて居るので、お互ひに反省しなければならぬ。佛教徒の方でも神様を輕んずるといふことのないやうにしなければならぬが、又神道の方の人でも佛教といふものは神道の敵だなどといふやうな、そんな馬鹿々々しい誤解を除かなければならぬ。又これはやが

た思想が混じて來たものだから、佛様を拜めば神様を拜まぬといふやうな者が出來て來ました。これは實際に眞實會の人々などが攻撃するのも無理はないのであります。例へば眞宗の信者などの中には伊勢の大塚をも受けない者がありました。自分の家では佛様を拜んで居るから、佛様を頼んで居たら宜いので、佛以外のものを拜むのは皆難行だといつて居ました。隨て神棚なども壊はしてしまふといふやうなのが徳川時代には随分ありましたがそれは全く間違ひである。それは信仰といふものと感謝といふものを混淆して居るのであります。

私共は神社に詣つて、何も自分の事を頼みはしない。併し國の爲に力を盡した方々に對して感謝するといふことは、貴い國民道徳でありますから、これを決して否定するには及ばない。自分の宗教的信仰が何であらうとも國民として國家の爲に力を盡した方々に感謝するといふ此の儀式を輕んずる筈はない。斯んな事はわかり切つたことでありますが、徳川時代にはさういふ間違つた考への者が佛教徒の中にありました。どうも國民として國を重んずるといふ心懸けの缺くる所があつてはならぬのであります。そこを責められるならば誰でも一言もないので、それは徳川時代に於ける一部の佛教徒の缺點でありました。此の點に對しては吾々も異議はない。實際佛教

て解ける事だと思ひます。

皇室の事を彼れ申上げるとは恐入りますけれども若し佛様を拜むのが神様を敬ふのと違背するといふならば、明治天皇御崩御の後に於て、昭憲皇太后陛下が沼津の御用邸に於て法華經を御書寫になつて、先帝御追福のお心持をお表はしになつたといふことは、宮中に仕へて居る者は誰でも知つて居ることでありますが、これはどう解釋すべきですか。何でも佛教は悪いといふ人の意見を通せば、皇室に對して怪しからぬ批判を加へ奉ることもなる。そんなことは全く間違つて居ます。皇太后様は御歴代の神靈を崇めるといふことは無論充分にお心得になつて居らつしやるのだけれども、宗教上の御信仰として先帝の御冥福をお祈りになるが爲に法華經を御書寫になつたといふことは御尤な次第でありまして、これは少くも神を崇めるといふ事と衝突することではありませぬ。是れが今の一派の議論にすれば、間違つて居るといふことになるのであるから、皇室の方々のなさることに對して御批判をお加へ申すことにもなるかも知れませぬ。それでは甚だ恐れ多い事ではないか、少し氣を附けたら宜いではないかといふことを先日申したのであります。決して日本國民として、佛教を信じたから國體を輕んずるとか、神様を輕んずるといふことのあらう筈はないの

であります。

吾が日本は有難い皇室の上に戴いて、國民は洵に純良なる性質を持つて居つて、本當に立派な國であるといふことは間違ひありません。但し本居宜長も申して居りますやうに、日本人は言擧げせぬ國民であります。言擧げといふのは説明といふ意味であります。言葉に出して説明するのは下手であります。これは斯ういふ意味だとは殆んど言はない。上に立つ方々もやはり御實行になるだけで、これは斯ういふ意味だ、斯う心得るが宜いといふことの説明解釋は殆んど仰しやらない。國民として各々長ずる所があるので、日本人は實行に於ては随分偉いけれども、説明することに於ては他の國に及ばない所があります。昔の神代からズツと習慣的に皇室を中心として正しい道を実行して来たけれども、社會が複雑になると人の心が動搖するから、隨つて様々な迷ひも起つて來、煩悩も多くなつて來る。その迷ひの多くなつて居る者をたゞ實行だけで率ゐるといふことは難かしくなつて來ます。また多勢の上に立つやうな人が皆行ひの完全な人なら宜しいが、さうも行かぬので、社會が複雑になると種の疑ひが起つて來る。その疑ひに對して、一部分の人が行ひを以て手本を示すだけでは間に合はなくなつて來る。そこで教を説くことが必要になるのであります。

れは斯ういふことだ、これは斯ういふ心持でやらなければいけないといふ、所謂教を興へる必要が感ぜられて來る世の中が單純であれば、教といふものを興へないでも、多くの人の上に立つ人が自分で實行すれば宜いけれども、何しろ人間が多くなつて來る、社會が複雑になつて來る天子様お一人がどれほどお徳が高くあらせられても、その御趣意が徹底的にわからなければ、下々の者の行ひが間違つて來るのは已むを得ない。そこで教といふものが必要になるのであります。

併し日本は言擧げせぬ國だから、他のやうに整頓した教といふものがない。實行には立派なお手本があるが、之を言葉に表はし、文字に表はす所の教といふものは、日本にはどうも乏しい。そこで此の缺點を補ふ爲に、他の國から日本に傳はつた教の中で役に立つものがあればこれを採り用ひて宜しいではないか。斯ういふことになつて來るのであります。これは國民の心を正しくする爲の一つの方法なのだから、他から傳はつたものだといつて少しも嫌ふには及ばない譯であります。例へば病氣を癒すのに、幾ら愛國心があるからといつても、外國の藥は一切服まないといふやうな、馬鹿なことを言はないでも宜い。病氣をした時に、それに外國の藥が良かったら服むが宜い。外國の藥を服んだからといつて、日本人が

外國の下に屬するといふ譯でも何でもないから、そんな馬鹿なことを言ふには及ばない。日本人を本當に教へ導く必要があつた時に、他國から渡つた教の中で一番良いものであれば、それを用ひて少しも差支へない。斯ういふことは當然であります。それが國を護る道であります。又それが神様の御恩に報ずる道でもある。國を本當に進歩させなければ、神様の御恩に報ゆることは出來ないのだから、教を重んずるといふことは、即ち神様の御恩に報ずることだと、斯う考へなければならぬ。之に就て少しも偏狭な考へを持つには及ばない。

此處にシツカリと御決心になつたのが聖德太子であります。そこで私共は聖德太子が非常に有難いと存ずるのであります。聖德太子が一面に於ては神様を敬ふといふことに本當に御心を用ひられたといふことは、日本書紀を御覽になるとよくわかります。推古天皇が詔をお出しになりました、日本國民は特に神様を敬はなければならぬといつて、御自分が先にお立ちになつて朝廷の百官を率ひて神様を禮拜する式を擧げられ、太子を初め、皆その席に列つて居られます。即ちお互ひに神様を敬ふといふことに特に意を用ひなければならぬといふことをお諭しになり、皆も之を実行するやうにお誓ひ申上げたといふことが日本書紀に見えて居る。決し佛教を信じてて神

様を輕んじたといふことではない。神様のお聞きになつた此の國を本當に發展させる爲には、人々の心がシツカリして居なければならぬ。人々の心をシツカリさせる爲には教の力に依らなければならぬ。その教の中で佛教が一番勝れて居るから、佛教に依つて人の心を建直すといふことが太子の御趣意なので、教がなく國が健全に發展して行く筈のものではない。この事はよく考へなければならぬのであります。何でも神様の護つて下さるのに頼つて、自分達は手を束ねて居ても國が發展するなどと思つたら、それは飛んでもない間違ひであります。そんなことは無責任の至りであります。その事は明治天皇の御製にハツキリと仰せられてあります。

千早ぶる神のひらきし道をまた

ひらくは人の力なりけり

神様の聞いた國だからといつて、皆が懶けて居てはならない。神様の聞いた道を更に開いて更に盛んにしなければならぬ。皆が骨折らなければ、神様がお聞き下さつた道の國であるからといつても、國は盛んにはならぬぞといふことを明治天皇が明かに言つて居らつしやる。それを佛教を排斥する連中のやうに、神様のなさつた通りにして居れば自然に國は盛んになるといふ考へは飛んでもない考へ違ひである。そんなことでは明治天皇の御製

の御趣意は貫徹しない。さういふ型に囚はれたやうな考へては國は盛んにならない。眞に神様の御恩に感ずるならば吾々が努力して國を益々盛んにしようといふ精神を持たなければならぬ。固より國民として是れだけの覺悟を定めなければならぬ。

そこで聖徳太子が此の事を思召されて、佛教を盛んにするより外はないといふことで、これに専ら力をお盡しになつた。それで前にも申上げた如く、聖徳太子のお考へは斯ういふ順序を違つて居る。

和——去私

正——直枉

先づ大切なのは和で、國民が一致協力するといふことが肝要である。『和を以て貴しと爲す』と憲法の第一條に仰せられて居る。皆私を捨て、國の爲に力を盡さなければならぬ。和とは私を去ることで、銘々が私の心持を捨てなければならぬ。自分さへ都合が好ければ世の中はどうでも宜いといふやうな私の心持であるから、折角神様のお開きになつた國が繁昌しないのである。それであるから私を去つて和合しなければならぬ。斯う言はれたのであります。そこで私を去るといふことはどういふことだといへば正しいことである。正しいといふのは人間の本性に合つて居ることである。人間といふものは決して

て自分一人で生きて居るものではない。互ひに助け合ひ互ひに救ひ合つて行くのが人間の本性であります。ところが皆此の正しいことが出来れば宜しいけれども、どうも人間が迷ひだらけであつて、世の中が複雑だといふと正しい心持が迷ひの爲に妨げられる。これではどうも仕様がなない。社會が複雑だといふとどうも迷ひが多くなる社會が單純ならそんなに迷ひはない。例へば電車に乗るのでもさうで、お客が少い時には皆親切で『あなたお先へ……』とやつてゐる。ところが夕方のラッシュニアワーになつて來ると、お先へ／＼では間に合はないから、お爺さんなど邪魔だといつて突き飛ばして乗るやうになる。これはどうも仕様がなない。世の中が複雑だとツイ／＼自分といふものが主になつて來るから、正しいのは己れの私を捨てることなのだけれども、その正しいことが何處にも行はれないやうになつて來る。つまり枉つた心持が多くなつて來る。それだから正しい事を實行しようとするれば、『枉れるを直うせん』で、枉つた心持を建直す方法を講じなければならぬ。兎角に皆心が枉つて、我儘になる。その我儘な間違つた心を直すことに骨折らなければ正しくなりはしない。此の枉れるを直うすることが何より必要である。その枉れるを直うする爲に何が一番良いか、それは佛法の信仰である。憲法の第二條に『三寶に

歸せずんば何を以てか枉れるを直うせん。佛の教に依らなければ、人間の心の間違ひは直らぬ。たゞ眼の前だけでなく、枉れる心持を根本から直して正しい方に向ける爲には、佛法の信仰が必要である。佛様は大慈悲を以て世の中に出て一切衆生を救ふ爲に教をお遣しになつたのだから、此の佛様の教を本當に守つて、此の大慈悲の佛様を信じて行きさへすれば、人間の心の迷ひが自然になくなつて、枉つたのが直くなる。枉つたのが直くなれば行ひが凡て正しくなる。正しくなれば必ず私を捨てるから、互ひに和合一致することが出来る。斯ういふことであります。それだから聖徳太子の佛教を御獎勵になつた意味は實にハツキリして居る。和合一致が出来て國が繁昌しさへすれば、御先祖の神様の御恩に報ゆることも必ず出来る。それであるから佛教を盛んにすることと、神様の御恩に報ゆるといふことは歸する所同じことである。そこが能くわからなければいけない。神様を描いて佛様を拜むのだと思ふのが根本から間違ひなのである。佛様の教に依つて凡ての人間の心を正しくすれば、御先祖の神様もお喜びになり、神様の御恩に報ゆることも出来るのである。その所を取違へるから凡ての議論が間違つて來る。能く考へれば決して斯ういふ間違ひの起る筈はないのであります。

一體佛教といふものは人間の心を正しくする目的の爲に信ぜられるものである。佛様に福を祈るが如きは、極く稚い信仰である。本當に人間が人間らしく生きるといふことが、佛教を信ずるところの眞の目的でなければならぬ。それで聖徳太子は佛教を御獎勵になり、文御自身にも佛様をお信じになつて、御身を以て信仰のお手本をお示しになつた。聖徳太子二十九年間の御生活は全く信仰の生活でありましたが、常に身を以て信仰のお手本をお示しになつて、皆を率ゐて行らつたのであります。

この事は事實であつて、後から理窟を附けたのでも何でもないから之を疑うてはならぬ。實際聖徳太子が二十九年間に、太子が身を以て國民をお率ゐになつた其の効果が現はれて、日本國は非常に盛んになり、支那からも日本に使をよこして對等の交際をするし、朝鮮も一時は日本を離れ掛つたけれども、任那と新羅と聯合して使をよこして、これから毎年貢をしようといふことと、日本書紀に見えて居る。つまり正しき信仰が國中に力を持てば、國が盛になるといふことは、此の事實に依つて能く證せられて居ます。よく吾々の友達の中にも、此の複雑な世の中で佛教を信ずるなどといふのは迂遠だそんなことで世界の競争に勝てるものかと言ふ者がある

けれども、この聖徳太子の事實を見れば何より能くわかる。あの時に國民が皆シツカリしたから國が非常に發展して、日本に迫害を加へようとした支那も手を引いてしまつた、日本に背かうとした朝鮮も日本に懐つて来たこの事實を否定することは出来ない。今後でも日本人が本當にシツカリした覺悟を持つて居れば、他からどんな迫害が來ても、迫害ぐらゐに屈しないで行くといふことは確に出来る。その教が立たないで、たゞ物質的に國を盛んにしようと思つても、物質だけでは、今の日本は何處にも及びはしない。全く物質がなければ國は立たぬけれども、今の日本を考へて見て、物質だけで何處に及ぶか。支那にも敵はない、アメリカにも敵はない、ロシアにも敵はない。支那は國民が食つても餘るだけの物を持つて居る。アメリカもロシアも國民が食つて餘るだけの物を持つて居る。日本は國民が食ふだけのものは無くして他から取らなければならぬ。だから物質のみで對抗しようとしたら、日本はズツと下に落ちてしまはなければならぬ。併しながら精神をシツカリと持つて行けば、お互ひの心の持ち方に依つて物質的の缺乏を補うて行くことが出来る。そこを日本人としては本當に考へなければならぬ。聖徳太子の御時から既にその御精神でありまして、日本國民の心がまつ直ぐになれば國は必ず盛んにな

あります。成程私共は天皇絶對といふことを固く信じます。日本に於て絶對であるのみならず、世界のどの國の君主と比べて見ても、日本の天皇ほど尊い方はないのでありますから、天皇が絶對だといふことを私は確く信じます。此の絶對の天皇が國民にお手本をお示しになる爲に、自ら屈して掌を合はせて下さるといふことは有難い次第である、斯う思はなければならぬ。吾々が子供を育てる時にどうします。親は子供の眞似をしてやりませう。子供に歩かせる時に、子供に歩行しろとは言はないで、あんよしろと言ふ。又子供を抱く時に、抱擁してやるとは言はないで、だつこしてやると言ふ。これで少しも大人の權威を傷けることはない。大人は子供が可愛いから自ら下つて子供の言葉を使って、子供に親しんでこれを導いて行くのです。また子供が歩かない時に、驅つてをしようぢやないか、どつちが早く行くかなどいつて、大人が騒げるやうな様子をして見せて、子供を勵まして歩かせる。これが本當の慈悲であります。それと同様のことで、天皇は絶對の方であるから、掌を合はせて拜まれるには及ばぬけれども、國民を教へ導く爲に掌を合はせて其のお手本をお示し下さるので、斯ういふことは實に有難いことであります。天皇が絶對の地位を態々下つて、皆にお手本をお示しになつたのだから、これは實に

るといふことを見定められて、攝政で居らつじやつた二十九年間に極力佛教を御獎勵に相成つた譯であります。この御精神は皇室の御歴代も皆御承認になりまして、その以後に於ても御歴代の天皇は皆佛教をお信じになり、又佛教を盛んにする爲に出来るだけの保護をお加へになりました。これは實際國が大切であるからである。國を護るのは人の力だから、人の心をまつ直ぐにしなければならぬといふ御趣意から佛教を御獎勵になつたものと思はれます。決して佛教を盛んにして佛に一身一家の福を祈るが宜いといふ思召ではない。そこを間違へてはいけません。全く人の心を正しくすることが目的で、人の心を正しくすれば國は必ず盛んになるといふことなのであります。

そこで茲に一つの問題があつて、徳川時代の漢學者などが始終議論をするのですが、天子様が佛様を拜まれるのはどういふ譯か。天子様といふ方は神様の御裔で、日本に於て絶對の方である。此の絶對の天子様が佛様に掌を合はせて拜まれるといふのは不思議な事ではないか。天子様以上の方はないのに、天子様が佛様の前で掌を合はせて拜まれるのは、どうも天子様の絶對といふことが瑕瑾が付くではないかと斯う言ふ。今でもさういふことを言つて居る人があります。今でも随分誤解があるので

有難いことであつて、斯ういふことをなさつたからといつて、天子様の有難さが減る譯でも何でもない。さう考へるのは全く間違つて居る。大人が子供に對してあんよとか何とか言つても、少しも大人の價値が變らないのと同じことでもあります。

天皇が靖國神社にお詣りになりまして、玉串を捧げて御拜になる。天子様としては臣下にお辭儀をなさる必要はないけれども、國民に皆この國の爲に死んだ人々に感謝するといふお手本を示される意味で、天子様もちやんと玉串をお捧げになる。今の論者のやうな言ひ分からは、天子様が靖國神社へ詣られて玉串を捧げられるのは、天皇の威嚴を損ふといふことになるが、そんな馬鹿なことはないではありませんか。だからさういふ議論は實に狭い議論でありまして、議論にはならない。天皇はいつでも國民にお手本をお示しになるのでありますから御自分は絶對の方だけれども、自ら屈して佛様に掌をお合はせになり、また靖國神社に行幸になれば玉串を上げて頭をお下げになるのであります。そこがわからぬから變な議論をする。どうも聖武天皇は三寶の奴と仰しやつた、天皇の威嚴を損するものであるなどいふけれども是れは國民に手本をお示しになつて、皆佛様の前に三寶の奴として仕へる、この通りにしろと、斯ういふ意味で

と書いてある。徳川時代の漢學者は佛教のことを少しも知らないで、無暗に攻撃したものであるから、斯んな間違ひも起つたのでありますが、昔は菅原道真であらうが三善清行であらうが、立派な學者は皆佛教に歸依して、さうして法華經を寫したり、般若心經を寫したりして居る。その昔の精神を汲んで見れば、佛教を排斥するどころの騒ぎではないのでありますけれども、その所が段段に間違つて参つたのであります。

斯んなやうなことを能く考へますと、今日佛教が迫害に遭ふなどいふのは、以ての外のことと言はなければなりません。さうかといつて佛教徒が他を咎めてはいけません。佛教徒自らが反省しなければならぬのであります。徳川時代の佛教を信する者の大多数は、お釋迦様の精神を失つて居た。佛教では人間の道を殆んど教へなかつた。それだから斯ういふやうな攻撃を受けても一言もない。明治維新の時に力を盡した西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通、朝廷に於ては三條實美、岩倉具視といふやうな人々の中で、一人として佛教の信仰を持つて居た者はない。これは佛教徒として實に恥かしい。徳川時代の佛教といふものは國事に力を盡す人を養成する力がなかつたといつても宜い。それだから西郷は王陽明の學を修め、漢學思想でやつて居る。その他の木戸、大久保、三

主にするやうになつてしまへば、佛教といふものは國の發展の妨げになると言はれても一言もない。それであるから今日非常に迫害が加へられるといふことに就て、ただ世間を咎めるばかりではいけない。佛教徒たるお互ひが、果して自分の信仰が世の中の役に立つかどうかといふことを反省して見なければならぬ。その力の無いやうな信仰を持つて居るならば、佛教といふものは世の中の邪魔をすると言はれても、一言もない。その所を私は餘程シツカリ考へなければならぬと思ひます。

今度も支那を歩いて、耶穌教の宣教師と日本の坊さんとを比べて見て實に恥かしいと思ひました。耶穌教の宣教師は支那に来る時には少くも十年、二十年、或は三十年、其處にシツカリ尻を落付けてやる覺悟を持つて参ります。さうして支那へ来るには三年ぐらゐ支那語を習つて参ります。さうして生活費は土地の人から一文も取りませぬ、皆本國の信者から支給されて居ります。さうして支那語を以ていろ／＼の事を教へ、土地の人に仕事を授けます。お前は手が器用だから西洋の婦人の頭に蒙る綱でも編んだら宜いだらうとか、君の所には斯ういふ物を植ゑたら宜いだらうといふやうに、あちらの農家の副産物は大概教師が教へたものであります。豚を飼ふこと、チーズを作ること、ソーセージを作ること等、教師

條、岩倉といふやうな日本の爲に本當に力を盡した人の中で誰が佛教に心から歸依して居たかといふと、一人も居はしない。尤も佛教の坊さんの中には、個人として勤王の運動をした者もあるけれども、國家の元勳が佛教に依つて教育を受けて居るか、啓發されて居るかといへばさういふ人は一人もない。その時分の佛教が概して來世を頼むといふやうなことで、この世を軽く見た佛教であつた爲に、佛教など信じて居て國の爲に力を盡せるものかと、斯ういふやうな考へで、西郷、木戸、大久保といふやうなその時分天下國家の爲に命を捧げた者は、皆佛教を重んじなかつた。これはどうも佛教徒として實に恥かしいことでもあります。そこを佛教徒が自ら反省しなければならぬ。何でも明治の初めの廢佛毀釋は間違つて居ると一本調子には言へない。その廢佛毀釋を抑へるだけの力が佛教の方になかつたとも言へる。これは餘程考へなければいけない事でありませぬ。

今日でもウツカリすると佛教の信仰といふものが實際の生活と離れ／＼になつて居る。一體道がなくて國が榮えるものではない。そこをシツカリと考へなければいけない。然らば人としての道をどの教が一番徹底的に教へて居るかと言へば、無論佛教であります。然るにそれを教へないで、たゞお布施を取つて來世の福を祈ることを

は一々仕事を教へる。さうして支那語を以て教を説いてやる。ところが日本の坊さんは何も教へない、支那語も少しも知らない。さうしてお布施だけ取る。それで佛教が弘まるのですか。そんなことで佛教を支那に弘めてそれに依つて日本と結合を圖る……などいふが、何を言つて居るのか少しもわからない。佛教徒がそこを反省しなければ、日本の佛教が他に弘まるものではない。身を以て手本を示さないで、口先だけで説法しても何の甲斐もあるものではない。況して口先の説法もしない。支那語を知らないのだから何の指導も出来ない。何の爲に教を弘めに行つたのかわからぬ、實に情けないことだと思ひます。斯んなことで佛教に依つて日本と支那との親善を圖らうといふことは思ひも寄らない。昨日も或る宗の宗務院の人に會つたから「どうせ布教師をやるなら食ふに困らぬやうにしてやつたら宜からう。土地から金を取らうといふやうな考へなら布教師をやめてしまふがよい。外國の宣教師は土地から金を取らない、皆本國の信徒から布教費を供給してやる。さうして周圍の者に金を散らして、皆に仕事を與へてやる。それだから耶穌教がどん／＼弘まる。日本もそれではなければいかぬ。今の布教師のやうなものはやめてしまつたら宜からう」と言つたのでありますが、或る土地では日本の坊さんが非常に

働いて居ると言ふから、其處へ行つて見ると、土地部といふものを拵へて、地面の賣手を見付けて、日本人に周旋して、其の間で手数料を取つて儲けて居る。それでお寺を立派にして居るが、一體何といふことをして居るのか。是れではまるで日本人の顔に泥を塗つて居るやうなものである。私は其處の軍部の人に會つたから、坊主を追拂つてしまはなければ日本人の名譽に關すると言つて参りましたが、それが一方では活動して居るといつて褒められて居る。何のことやら全く譯がわからぬ。斯んなことでは仕方がない。やはり佛教に迫害が來るといふに就ては、佛教に關係して居る人にそれ／＼責任がある。

自分達が本當に心の持ち方を直さなければならぬといふことを自覚しなければならぬ。是れはなか／＼容易ならぬ問題であります。併し佛教を迫害して本當に正しい教が立つものではない。只今申上げた歴史上の事實を見れば、日本の國民性が今日の如く立派になつたのには、佛教のお蔭を受けて居ることが非常に大きい。これを無視するといふことは誤りだから、斯ういふ主張する連中の間違ひを直さなければいかぬが、たゞ之を攻撃するばかりではいかぬ。佛教徒自身もモット深く考へなければならぬ。自分の方で尊敬されるやうな行ひをして行かなければ、迫害は防げないと思ひます。何だか兩方の悪口を

言ふやうだけれども私は心から斯う思ふ。お互ひに人の事より自分達から一つ本當に信仰して、自分の私を捨ててやらなければならぬ。人の悪口ばかり言へないから、餘程自分で氣を付けて、自分も出來るだけ質素な生活をして、幾らかでも教の爲にお役に立つやうにとお互ひに念願すべきであります。

もう一つは日本が今世界のどの國にも敗けないと言つて居りながら、西洋人に褒められると直ぐに有頂天になるが、これは悪い癖です。やはり明治の初めに西洋人が偉いと思つた癖が遺つて居るのでせう。西洋人が褒めると無茶苦茶に喜ぶが、これはいけない。西洋人の日本に對する批評といふものの中で、的に中つて居るものは殆んどありはしない。だから西洋人が褒めても、褒め方が間違つて居るのだから、別に喜ぶには及ばない。何でも西洋人はつまらぬ／＼と言ひながら、肚の中では西洋人が偉いと思つて居るから、西洋人が褒めると無暗に嬉しがるのです。某といふドイツ人が島地大等さんに就いて天台宗を習ひ、天台宗に就ての著述をして居ります。それを私は讀んで見たが、獨逸のシェーリングといふ人の哲學に引付けて、シェーリングの學說で天台宗を解釋して居るので、天台の本意とは大に違ふ。それをドイツ人が天台を研究して居るといふので、大僧都がなにかの位

を興へたさうですが、實に馬鹿々々しいことであります。それからアメリカの或る新聞記者が日本に來て、日本の神代のことを研究して、いろ／＼著述をしたといつて、神道の連中などが喜んで政府に交渉して、勳章を贈るとかいつて居ました。そんな事ではいけない。西洋はつまらぬ／＼と言ひながら、西洋人にちよつと褒められると直ぐにのぼせ上るといふことではいけない、もつとシツカリしなければならぬ。本當に佛教の信仰といふものは今では日本の外にはないのだから、日本人が本當にシツカリして、教の根本を辨へるやうにしなければならぬと思ひます。

斯ういふやうな譯でありまして、殊に日蓮聖人の教を奉ずる者に取つての迫害といふものも、向ふが議論で來るのなら、吾々も負けない氣になつて議論しても宜しいけれども、先方から妥協して來られると、議論しても追付かないので、まあどうも當分の所は面倒な事がいろいろ起るであります。併し正しいものは最後に勝つのでありますから、吾々自身としては、吾々の信仰を決して枉げないやうにしなければならぬ。大きいお寺の本堂の眞中に掲げる本尊には天照、八幡のお名前が消えてなくなるかも知れないが、銘々の家までそんなことを強要されることはないでせう。吾々はいつでも正しい

本尊に向つて、正しい信仰を持つて、お互ひに志を同じうする者が、少數でも宜しいから結束して、さうして時の來るのを待つべきであります。又自分の信仰を以て本當に支那人にでも、向ふが本當に懐いて來たら教へてやるといふシツカリした覺悟を持つて、この世の中の面倒な所を通つて行くより外ないでせう。慌てゝはいけないといつて又屈してしまつてはいけません。此の際にはシツカリとお互ひが覺悟を極めて、自分達は日蓮聖人のお教へになつた此の道をまっ直ぐに歩いて行かう、右も左も見ないで行かうといふだけの決心を持つて行かなければなりません。政府と強ひて喧嘩をするには及びませんが、形の上で向ふがいろ／＼な文句を言つて來るならばそれは暫く屈しても宜いが、併し心まで屈する必要はない。吾々は法華經を中心とする信仰といふものは間違ひがないといふことを確信して居るのだから、此の確信を少しでも動かすには及ばないと思ふ。併し又此の佛教で支那に進出して、五年か十年の間に支那人を皆心服させるといふやうな、そんな夢を見て居てはいけません。そんなことは逆も駄目であります。第一日本の内地でさへ信仰が統一されないのに、支那に行つて何を教へますか。支那人に「佛教を信じなさい」と言つても、「佛様はどういふお名前ですか」と言はれると、それを信じるとも言

へないので、結局どれを信じて宜しいかわからないといふことになつてしまふ。實際上海邊りでも本願寺別院もあれば禪宗の寺もある。本願寺別院へ行くも本願寺別院も

陀様だと言ふ。本願寺へ行けば本尊は南無妙法蓮華經だと言ふ。曹洞宗の方へ行けば佛といふものは別にない、己心が佛だ、佛は自分の心の中にあると言ふ。……支那人は何だか譯がわからないと思ふでせう。斯ういふことで外に向つて教を弘めるといつても、何を弘めるのかわからぬ。……共通なものは何だといつて、だん／＼共通なものを探せば、善い事をして悪い事をするなどいふことになる。それでは佛教でなくとも何でも同じことである内輪に於て本當の信仰の中心といふものを確立し得ない間に、無暗に他に手を伸ばしても、何を弘めることも出来ない。モット内輪が一致して自分達の信仰を固めるといふことに掛らなければ、今日の日本の信仰界の状態を外に向つてその力を伸ばすといふことは無理です。こゝをお互ひに能く考へなければならぬと思ひます。吾々は凡夫であります。それに一生懸命やつても、最早や年を取つて居るから、その内死ぬるであらうけれども、斯んな人間でも生きて居る間は責任があるから懶けては居られない。どうかシツカリと信仰を勵んで、將來この佛教が日本の中心として立つて行く上に幾らかでも貢献するこ

とが出来たら本當に有難いことだと思つて居る次第であります。

以上いろ／＼取り止まりのない事を申上げましたが、私は時節柄斯ういふやうな考へで自分の信仰を勵んで行かうと思つて居るのであります、私の考へを有體に申上げまして皆様の御参考に供したのみであります。

(二六・九・一六)

=!=
=!=
=!=

本佛實在の宗教哲學(八)

河合 陟 明

七

かくして實在概念は必然に所有概念・屬性概念即ち質量概念に發展せねばならぬ。否實在は本來質量を所有し内包量を所有し、否寧ろ能有すといふべく、即ち無限の屬性を本有し無盡の法藏を本具してゐるのである。然らばその質量とは何ぞ、法藏とは何ぞ。それは即ち正に十界であり三千であり萬法であるのである。

問、一念具十法界、爲三作念具、爲三任運具、答、法性自爾、非三作所成、如一微塵具十方分、……問、念性離、緣性亦離、若無緣無念亦無數量、云何具十法界耶、答、不可思議、無相而相、觀智宛然(止五ノ二)

十界無相、而具十界之相であり、觀爲能觀、十界爲所、點空論界、界無界相、有作の緣念本無にして能所を亡滅すれどもしかも亦無作の境智宛然なるものである。いはゆる以三無緣智、緣三無相境、即ち智離緣境、稱境無相、故に亦無相而相、發智宛然たり。又以三無相境、相三無緣智、即ち境離發智、令三智無緣、故に亦無緣而緣、照境無間たり。かくして實相無相なれども無相亦無、實智無緣なれども無緣亦絶。何となれば境離無相、當爲智緣、また智離無緣、當爲境發、こゝに境智相照し無盡に交映し、圓融循環して極まる所がない。本有の眞如實在はかく無作先驗的に、能有の智照と所有の寂體とを本有し、しかも能照の知が所照の有を包むといふ自覺的性格を有ちつゝ、しかも全く能知所知一如して、智如如於境、境如如於智、境智相稱・境智俱淨なる如如を無作に形成し、或は又互に能住となり所在となり以て能住住所住、一の本住法を形成しつゝしかも亦無住に住し、無生の本際であり無作の實際であり無如の一如であり、起信論に所謂、心眞如者、即是一法界大總相法門體、言眞如者亦無有相、謂言說之極因言

遺言、此眞如體無有可遺、以一切法悉皆眞故、亦無可立、以一切法皆同如故、當知一切法不可說不可念故、名爲眞如。眞といひ如といふは本有無作の實在自體いはゆる無思無念、無造作、故名無作。ところのものを表現し把握するに最も適當したるものであるが、しかもその眞如とは法性であり、法性とは單に一理に非ずして性具三千なるものであり、即ち一性無性三千宛然、一念無念內體三千なるもの、しかもその一念を能とし知とし覺性とし照すものであり、その三千を所とし有とし覺蔽とし照されるものであり、しかも更に交互に相照融通するものであるといふ、この二面と並びにその一如なる性格は、純眞如法性實相界・理極の涅槃界・本有そのものの無作界にあつては飽くまでも喪はれるものではない。

かくして本有の實在は本來理的覺體なるものであり、それは更に本能有の覺性が本所有の覺蔽を能有することをして原則となすといふ、ノエシス的とノエマ的なる二面の *noetic* 的構造を本有してゐるのであつて、これを即ち理本覺と稱するのである。無作即ち先驗的原理門における本有體系は亦無作の原理的なる本覺體系である。換言すれば實在は本來自覺的なるものであつて、その自覺的原理は亦即ち自己限定作用をなすといふ作用的原理をなしてゐるものなのである。即ち本來知るとは本來働くといふことであるが、しかも無作の状態にあつては自己の全面的限定作用をなしてゐるといふべきであつて、従つて作用といふべき痕跡をすら止めず、たゞ如實に純粹に宛然として自己の全體を映してゐるもの、自己自身を受取る場所となつてゐるもの所謂照境無間なる状態にあるものであるから——勿論それは非人格的なる、或は人格以前の、歴史の根柢たる、原理的なる超時間的先驗界に於てであるが、かくしてそれは働くといふ痕跡なき働きてあり、宛も無限の速力を以て圓周上を走る力は靜止せる如き働きてあるが如く、従つてそれは現實界に下り來つて個體的人格化の働きをなし、その經驗體系の無限なる積聚の極限に於て顯るゝ人格完成の佛陀の、以如如智契如如境、境發智爲報、智冥境爲受、從理名如、從智名來、即報身如來といふ佛智と佛果の *Urhid* として、未だ人格化せず意志化せざる純粹根源的領域における境智用一如の相、或は色心業未分のアブリオリであるのである。かゝる無作界にあつて本有と稱性と爲用と、即ち有と知と行との三者は本來即ち中と空と假との性徳三諦をなすのであり、かくて本有體系は亦一如體系でもあるのであつて、一の實在を有ともいふべく知ともいふべく用ともいふべく、寧ろかゝる有とか知とか用とかの區別をなすべからざるものである。

これを推論式的系列としていへば、今有の一切は即ち本有であり、本有は自有であり、自有は本有であり、かくして本有體系における無作とは即ち無生門であり——これ摩訶止觀といふ觀心法門に於ても亦その認識論的根本原理であつて、故に十乘觀法の破法遍はこれを根據として次で歷諸法門、更に橫堅不二に發展するが如く——而して無生とは本不生であり、本不生とは本生であり——こゝに法界における實相觀を己心に拉し來つていはゆる大乘本生心地觀が成立つのであり——而して更に本生とは本性であり——即ち一心本有の生・本來の生、一心に由來する生、一心とはしかもこれ根源であり亦實在であつて、この根源より發し實在に根據する生、否その根源的實在そのものに合せる生、實在そのものとしての生であるのであり、——従つて本性とは既にかく常恒不變の常現在の生である以上はもはやこれ生としての作用的或は發生的なる痕跡をすら留めざる本照であり本證であり本覺であり、而して本覺の智によつて何を知り何を照すかといへば、即ち本有無作の實在を照すのであつて、こゝに終は始に還る、初は終に顯れる。認識は *Kretsformig* の自覺をなす。しかもそれを今は純粹先驗論理として超時間界に於て論じてゐるのである。所謂境とは萬法の當體をいひ智とは自體顯照をいひ、かくて即ち稱性の知即用即有、換言すれば、稱性とは即ち照性であり證性であり即ち知であり智であり、又それは用であり、又そこに實在の體即ち有があるのであり、かくして圓融循環無碍自在なるものである。しかも亦宛然として三種の關係を軌範的に一如内在してゐるのである。従つてこゝに眞性軌と觀照軌と資成軌といふ三軌のノルム或はゾルレンが、實在の本有の先驗的構造として成立つてゐるのであつて、従つて又こゝに性徳門における三千即中即空即假なる正了縁の三因佛性が論ぜられるのであり、これが修徳門即ち自覺的に開展して境妙・智妙・行妙といふ迷門十妙における實踐的原則をなし、自行の因果の三法妙を成ずるに至るのである。他語以ていへば、西田哲學等における有るものと知るものと働くものといふ三者の關係をなす所の自覺的體系の發展、或は具體的一般者の自己限定をなすものとなるのである。

従つて本有體系は元來其自身に本覺體系であるのみならず、又本有體系或は本行體系であるのであつて、かくて實在はその本有不改の性質として、従つて又これを智的に自覺し即ち認識したるときに於ても覺了不改の性質として——所謂知ることには有ることに何物をも加へないが、しかも知ることによつて始めてものが眞に自己のものとなるに至る、その自覺の内容として——本來この三軌の法則的關係をなしゐる所の本法といふべきものであることを知り得る

のであり、この軌範的法則性に則りこれに乘じこれを實現することによつて、實在の自覺的限定としての即ち吾々自身の人格としての目的を達成することができるのであつて、それが亦即ち實在そのものの自己目的を達成する所以でもあるのである。寧ろ次の如くいふべきであらう、元來自覺に根據して自由なる行爲的主體たる吾々が、自己の一念の意志によつてこの三軌の法則を自己の目的體系に攝取し、その實現への意志の斷えざる飛躍的連続の發展充足によつて、實在の本有する内面的必然力たる因果律即ち宇宙生命の絕對意志に運載せられて、吾々個體人格の且つ宇宙意志の目的たる絕對の善と覺りを完遂することができるのである。故に本有は即本法にして亦即佛乘たり、是が覺者より複製せられて教法及び行法となるのである。而してその自覺といひ個體的人格化といふは、一大本法たる性具三千の本覺體系における無作の覺性が無作の覺識を要求し限定する處に成立つのであるが、しかしその限定の必然性を本有無作なるものの内面に於てのみ之を求めることができらうか。

元來萬有は一絕對の眞如法性即ち予のいはゆる無作本有の根本實在に於て存し、且しかも根本無明に壓せられて存し、しかもその眞如法性の運動は全く自由にして且又必然の鐵則に貫かれてゐるのであつて、従つてその運動は自由を必然化し必然を自由化するものであるが、その最深の要求即ち最後にして最初本來的なる根本動向に於ては自覺への意志であり、行爲して自覺するものであり、善を行つて絕對の覺りに達せんとするものである。換言すれば人間を始め萬物は迷ひつゝ善を求むるものであるのである。所謂凡地一念の心に十法界自由の人格性と十如必然の相性因果を具するのであり、一々の界に悉く煩惱・惡業・苦道の性相を有つ。その煩惱は智慧觀照の性相であり以て迷明故起無明、若解無明即是於明、又その惡業の性相は即ちこれ善の性相であり、惡中有善、善成還破惡、又その一念の心に十界の識・名色等の苦道の性相を有するも、若悟三生死即是法身、故に苦道の性相は即ちこれ法身であつて、一は實在における自覺の原理を表し、二はその意志の原理を表し、三は實在性そのものを表す。夫有心者皆有三道性相は、即是三軌性相であるのであつて、この故に三道の輪廻は生死の本法たるも、一たび自覺と實踐の無窮の向上により因果の發展を辿らば、遂には始め衆生の極迷より終り覺者の極果の境界に至ることができるのである。この意味に於て萬有は佛性の向覺・行善であるといふことができるのである。

然るに無始忽然念起の根本無明が一たびこれを壓し來たるや、こゝに實在の無作本有の構造たる、知が有を包むと

いふその地位は顛倒し、即ち却つて有が知を包んで知は閉ぢ込められ棄塞され、まさしく無明即ち明無く蒙々たる不覺的なるものとなる、否既になつてゐる、本有にして無作なる自覺的實在は既に無始の現實として無始の不覺的存在となつてゐる。故に今有の現在亦まさきに無明不覺の眼前現實である。無始時來、一たび元品の無明變ひ來たるや、本來知見覺證的なる法性心性佛性は忽然として暗々團々たる妄想夢裡のものと化する。眞如法界は無明法界と轉する。しかし何等の光も指さぬといふのではない、全く黑暗々といふのではない。いかに無明の暗雲裡にありといへ、いかに妄想の重壓下にありといへ、實在はなほ自覺の痕跡を残し、否自覺の根本形式を存し、知照の本來的構造と性格を保持してゐる本有してゐるのである。もしこの根本意識性が全く喪はれて了ふならば、それはもはや物質となる唯物的となる機械的となるの外はない。心はなくなる識はなくなる精神はなくなる人格は全く喪失する外はない。否抑も一切の存在・一切の性質・一切の働きは、凡て本有無作なるが故に、知るといふことも亦本有に根據し本有より出で來らねばならぬ。本有の實在は知をも本有し、本來知的なるものでなければならぬ。越くとも知るといふ性質・見るといふ働きを、その一面として有するものでなければならぬ。而してかく一切のものが本有なる限り、それは的しく本有不改の性なのであるから、その存在や性質や働きや力は永久に喪失され得ない、絶滅され得ない、することはできない。翻つて自覺といふことより見るも、自覺といふことは自有といふことであり、自有とは本有といふことであり、翻つて又本有なるが故に能く自覺たり得るのである。自己の能有する所有物たらざるものを自覺することはできない。かくの如きものは一物と雖も知ることではできない。一切の存在は本有なるが故に、存在の一切の運動は自覺の外にはない。萬有の運動は自覺の變形である。ニュートンの宇宙引力といふのも、無作本有の超個人的普遍我たる眞如絕對意志の射影に外ならない。萬物は知るといふ相の無限の Modus としてあるのである。物質と雖もライブニツツのいふ如く瞬間的意識であるのである。たゞその連續をなさせ、記憶が自己自身を維持せざるが故に、所謂意識現象を呈せざるまでである。草木亦心を有し、既に心を有すれば本佛性を有す、所謂非情佛性惑耳驚心である。乃至心具三千・色具三千であつて、理の性具はこれ等しく、事相の現實に於ても亦萬有は一大量差律を形成してゐるのである。

かくの如く實在の自覺的性格と能力は、無明の根柢・不覺の内奥にもなほ存在してゐるのである。闇の内になほ闇

が輝き、夢妄の長夜になほ閃光を放つてゐるのである。然しながら既に無明に覆はれてゐる限り、明らかに知るものでなく如實に見るものではない。此に於てか實在は無限に深く自己の内容を求めねばならぬ、自己自身を所有し、否能有してゆかねばならぬ。自己自身を眞に知り眞に見、眞に自己自身と爲り、自己自身で有ることを要求してゆかねばならぬ。飽くまでも具體的な内容ある眞の自己を追求し、眞の人格を構成してゆかねばならぬ。こゝに實在は意志となる、行爲者となる、活動者となる、無限なる働きを、時を、歴史を展開する。而してこゝに萬有の運動は無明の變形となる。しかもかるが故に亦その運動はその無明を破る運動とならざるを得ない。それは實在そのものの根本性格と根本動向がこれを要求し而して爾か有らしめてゆくのである。

かくして萬物の運動は、本有の實在が根本無明に縁せられて——これを予の思想に於てカント的表現を以ていへば、原質的に覺自體なる有自體が無明に *attribution* 觸發せられて——こゝに本有實在それ自らの内面に本有するところの、即ち本有即本覺即本行としての可能的運動作用を、原理的より直ちに現實化し來たるのである。固より佛教論理の批判検討を加へれば、龍樹及び天台等が、夙に中智二論及び三大部等に於て、極めて詳細に且つ巧妙になせるが如く、即ち佛教独自の辯證法的論理として、一切は自・他・共・離の四句の性計を絶して、俗諦破性・眞諦破相、我空法空・性相二空、乃至、十八空、一切虚妄の假名字相を超え不可説不可得なるものであるが、所謂四悉檀の因縁に應じては亦自在に説くべく、これを肯定的には、萬有現象は無明を媒介とする本有の自覺であり、所謂ヘーゲルの *Der Geist ohne Bewegung ist leeres Wort*、これを自覺といふ點より見るも、自覺とは自己の内容を要求してゆくことであり、その内容とは本有のものでなければならぬ。本有ならざる何物をも自覺することはできない。本は凡て自であり又自となり、自は凡て本となり本に還る。自は本始であり今である。本有と今有は又無作と有作との關係であつて、その媒介は不有である即ち無明である。故に又所有といふ點より見るも、本有が無明に覆はれ煩惱に壓せられて不有となつて居る、その無明を破り不覺を斷じ不有を説して本有のものを更たに所有する否能有する更たに本有となるといふことは自覺の外にはない。實在は常に飽くまでも自己を所有し自己と爲り自己を知り自己に還り自己を受用し自己に安住せんことを求めるのである。こゝに法界無量品の無明を破る破無明三昧の實踐修行が現れて來るのである。それは常に意志的有作なる認識と行爲の連続であらねばならぬが、しかもそれが常に無作たることを要求し

つゝその根源に徹しゆくとき、願つてそれは本有無作なる實在そのものの純粹内面的創造として純粹自覺・純粹思维・純粹經驗・純粹直觀なる創造的行爲となり、實在即自己・自己即實在として實在を全く自己の内面に包み自己の内に見自己の内に生む、否自己を全く實在の内面に生む實在自體の人格的活動となるに至る。これを古來無作の妙觀妙行といひ、予は修行無作と稱するのである。

而してかくの如き行爲によつて創造さるゝ認識といひ知識といひ、否行爲をも知識をも一括して寧ろ常にその根柢をなし内面をなす所の一般に意識といひ自覺といひ知るものといひ見るものといふは、一空が眞假を、一念が三千を、能覺性が所覺を、純粹形式が純粹内容を、無が有を、限定する所に成立つのである。逆にいへば、萬假を一空に、萬法を一如に、萬有を本有に、無限に多なる相互的限定作用をその超限定性そのものに於て、或は無量の個々相對特殊なる多元的被限界物をその超限界面そのものに於て包攝し把握する所に成立つのである。限定とは限界定立である、自己自身を *clear and distinct* にすると共にそこにおのづから限界が構成される、或は後者によつて前者が可能となる。しかしその根柢及び内面には常に限界融通なるものがある、寧ろそれが眞の直接の自己である。これを客觀的對境に就ていへば點・空論・界、界無二界相、これを主觀的觀智に就ていへば觀住・於境、以三無住法、住・於境中、ものである。これ實相を緣し法性を見中道に住するもの、即、邊而中・即、事而中、造・境即中、無・不・眞實である。これ即ち、特殊が一般に於てあることが、或は有が自己自身を否定してその場所となること、即ち知ることであり自覺であるといふ西田哲學の述語論理ともなるのである。

凡て限定性と超限定性、或は被限界面と超限界面、即ち有と無、又は假と空との二面の性質或は作用がなければ自覺は成立せぬ。意識とか知識とか認識とか行爲とか、凡て人格といひ精神といひ心といふものは、この二面がなければ成立せぬ。而して既に空假の二面があればこれを統ぶる一なるものがなければならぬ。それが中道であり中諦であり、而してかゝる中道とは根本實在たる無作本有そのものであり、従つて亦萬有存在の實相であるのである。中道は常に空假を双非し双照する統一なるものである。天台の所謂、双非理極即法身也である。これに對して双照智極即報身也といふべきであり、而して前者より後者への中間領域に於て、或は發展的過程に立つか又は流轉的墮落に向ふかの種々様々なるものが、即ち萬有諸法であり一切の迷妄界であり又吾々の佛性向覺であるのである。此に於て

か實在は中道であり中道三諦であり中道第一義諦であるといはねばならぬ。夫三諦者 天然性徳である。實在は三諦であり、それによつて認識が可能となり、換言すれば實在は認識の原理を本有してゐるものである。從つて實在は自覺的なものであり、或は寧ろ認識の形式に於てあるものが實在であり、自覺的なものが實在であるといふべきであり、又それによつて限定作用としての行爲が可能となる、換言すれば實在は亦行爲の原理をも本有してゐるものであるであつて、先に述べた如く、三軌即本法としての本有の實在であるのである。萬有は根本的に盲目意志ではないのである。故に吾々の人格及び行爲は常に論理的に自己同一的なものであるのみならず、亦更に倫理的に自己責任的なものである。その因に於て果に於て縁起的無限の歴史的社會的聯關性を有して、*Werkheit* *Wirkung* をなすものではあるが、その歸結する處は自己の一念の己心にあり、故に華嚴經に説かるゝ如く、菩薩の一切の行願は一に用心の如何に存するのであつて、それによつて一切勝妙の功徳を獲るのであり、こゝに於て天台が法華玄義の本迹十妙の第十功徳利益妙にはゆる一念益心となるに至るのであり、而して又それゆゑにその初に於てよく觀一念起心、即ち

觀三根際相對一念心起、於二十界中、必屬三二界、若屬三二界、即具三百界千法、於一念中、悉皆備足、此心幻師、於一日夜、常造種種業生種々五陰種々國土、所謂地獄假實國土、乃至佛界假實國土、行人當自選擇、何道可從(支)といふ觀心の實踐とならねばならぬのである。深く考へれば認識も作用であり自覺も行爲であり、又逆に行爲も知識であり作用も自覺である。フイヒテの所謂 *Tatlandung* であり *Die Tiefe ist ein reines inneres Tun* である。しかも働くものの根柢にはなほそれを超えそれを包みそれを生みつゝ、しかも永遠に見てゐるもの永遠の知・永遠の今・永遠に今があるのである。しかし亦常に三者は圓融一如のものであり、即ち有と知と用と、換言すれば實在と認識と行爲とは常に相依相成して、離るべからざるものである。

而して實在の本質たる中道の内面をなす空と假との二 *Komponenten* が相互的統一を求めるといふことは、亦自己統一を求めることである。何となれば深く考察するとき一諦其自身の自己定立は即他者定立であり、相互維持にして且つ相互融即であり、限界構成にして亦限界超越なるものであるからである。空とは假に對して空なのであり、假とは空に對して假があるのであり、否空を點じて假あり、假を泯して空あり、故に空は自ら空を假する性質を有ち用を有ち、假は自ら假を空する性質及び作用を有つ。否この性質と作用あるが故に空は自ら空を維持し且つ假を維持し、否空自身を維持することが假を維持する所以であり、或は亦寧ろ他者なる假を維持することが却つて空自身を支持する所以となる。故に又逆に假に就てもこれらの關係は全く同様である。二者離れては意義をなさぬ、といふよりは寧ろ、空は自ら自己を限定して假化し、假は自ら自己を超越して空化する。限定性と超越性、自己肯定性と否定性、或は限界構成と超限界作用即ち限界融通といふ二面を、空と假は各々共に有する。故に空は其自身が假であり、從つてまた空其自身が中となる。何となれば空が自己自身に空であり且つ假であればそこにおのづから中があり、即ち空は自己自身と假なる他者とを雙照し亦雙非して中となり中であるからである。假に就ても同様であり、中は勿論然りである。故に一諦は其自身が二諦であり亦三諦である。一諦が直ちに三諦を含み三諦を統べる。自はみづから亦おのづから他であり從つて自他の統一者でもある、或は自他の否定者であり、唯だ如である。一如即三諦・一性即三諦、三諦即本有にして即空即假即中圓融相即、故に三諦が亦各々その三を立派統して、一空一切法を泯し假中を泯し空自らをも泯し、一假一切法を立し空中を立し假自らもまた假立であり、一中一切法を統し空假を統し中自らを統し、三諦九諦重々無盡なる融即の論理を成立せしめるのである。假は對象であり空は認識であり即ち境智をなす、又空は知識であり假は行爲であり即ち智用をなす、しかも二者常に相融して中道を成す。

問、智能照境、境亦能照智不、答、若作不思議釋、更互相照、義亦無妨、仁王般若云、說智及智處、皆名爲般若。智處是境、當知境智俱名般若、故得說境及境照俱名實相。智既是心、境亦是心、既俱是心、俱是法界、心心相照、有何不可。繫緣法界、一念法界、一切無明顯倒、永寂如空、即念爲繫、寂而常照、即繫爲念、照而常寂。此一行三昧、即是、一切無碍人、一道出生死、一切諸法中、皆以三觀入、解慧心寂然、三界無倫匹、此乃一行攝三一切行、行融智圓、是故爲妙。(支)

而して三諦は客觀的に見たものであるが、これを主觀的に見れば三觀である。しかもこれを一心に於て觀る所に天台獨自の觀法たり即ち宗教實踐たる一心三觀が成立するのである。認識にせよ行爲にせよ凡て三諦は實在の根本原理である、その特色を一言でいへば自覺的な所にある、これが實在を原則として覺自體といふ所以であり、これを究極完成すれば草木國土悉皆成佛といふ宇宙生命の永劫進化の大理想、即ち佛教の大理想たる十界皆成を完遂し得る所

以であるのである。しかのみならず既に一人の開覺に於ても所謂一佛成道觀見法界すれば、萬法は本有に覺自體たる
 ことが證得せられるのである。しかも性は直ちに修に、先驗は直ちに經驗に推移發展し、理は直ちに事となる可能性
 を有つ、先驗的無作の智的自覺性と行爲的自由性とが直ちに經驗的のそれとなり得る。その充足原理は意志であり、
 その意志の發展形式が因果をなすのである。因果は實在の本質そのものの内面的必然の發展作用であり自己實現力で
 ある、因果とは實在の質量作用の法則である、即ち十界性そのものの自己充足力であり絕對意志である。他語以てい
 は、因果は行爲の軌跡であつて、數學的空間を流動せしめてこれに具體的な人格的内容を入れた歴史的時間におけ
 る多項定理である。しかし存在は單に可能から始まるのではない、無作の理から始まるのではない、それは唯だ無始
 の現實であり無始の事であり即ち十界事常である。歴史的现实の因果は無縁連續體系にして極まる所を知らず。而し
 て與へられたものは過去に對しては求められたものであり、未來に對しては課せられたものである。その課題解決の
 方法と態度が *maishokhu* なる價值を實現する個性の意味をなし、即ち歴史の意義をなす。しかもその歴史とは實
 に法界社會の法界歴史をなしゆくもの、即ち全法界の存在者と關聯して、小は一念の己心より大は法界の實相と交
 渉し、無始無終なる三世無限の生命史を経過し來り且つ構成しゆくのである。單に人間社會とか人類歴史とか地球上
 とかいふ如き一小部分のものではない。廣大無邊なる法界生活に連關し展開しゆく所のものである。華嚴學的には所
 謂諸法無盡の緣起をなし、これを更に人格的に規定して天台學的或は法華經的には所謂十界無盡の感應をなしゆく所
 のものである。而してその目的は一言にして涅槃の體現にある。ヘーゲルの所謂歴史は自由の發展なり、そ
 の *Probat* の眞の意味は佛教の *Nirvana* であり解脱であり降魔成道であり開覺成佛であり無上菩提でなければなら
 ぬ。即ち如來の境界における大平和と大活動であらねばならぬ。しかもかゝる法界的な大生命の自覺と目的と大向上の
 希望を深く、一心の奥底に藏しつゝ、我が歴史的现实の生そのものの眞直中に於て、無上命令的に、一面には人類
 世界に理想的文化と道義との樂土建設のため、更に進んでは全人類を驅つて本佛常住の絕對境に無限の向上を迫らし
 むるため、即ち現當二世一貫の大菩薩行として、即ち全人類に遍きところの現世及び永遠生命の無限の救済のために、
 然りその靈肉兩面貫申の眞乎の救済のために、今こそ我々は天業恢弘の大菩薩行を行じてゐるのであつて、同時に日
 本民族は省みて内に深くかゝる法界的生命と向上の大自覺を喚起し、大信仰に立ち來らねばならぬ。こゝにこそ本佛

の感應は世界史の眞直中に偉大なる歴史的啓示 *Kropf Offenbarung imitten der Menschengeschichte* として現れ
 來たのである、然りその深遠なる確信に立つことができるのである。近代人間學の課題たる「宇宙における人間の
 地位」而して「全法界における皇國日本の地位」國家的自覺・民族的自覺、否、日本民族の法界的自覺、宗教的自
 覺・然り宇宙間眞乎の宗教たる佛教的自覺！既に警鐘は亂打せられてゐる、世界史の新たな黎明は既に訪れんと
 してゐる。果然大東亞降魔戰は、本佛應現の成道會に切つておとされた。祖國の民よ、聞け、既に警鐘は亂打せられ
 てゐるではないか。日本國家の内部そのものに今や洗禮の砲火は向けられねばならぬ。云く國體と宗教の最後の問題
 も、正に今や黎明の光を迎ふべきものであらねばならぬ。あゝ歴史の内奥は神祕なる實在に直接してゐる。

南無妙法蓮華經

昭和十七年一月十六日 聖應院日生恩師の圓寂に因むの日。太平洋の怒濤を睥睨しつゝ房州天津旭洋莊の淨齋に記
 す。(つゞく)

記事

本部 團報

元朝會 一つの年でも一元日は昨日の鬼が産に來る」といつて僅か一日の違ひで元の気分はお互に云ひ盡くせぬ晴やかな又悦ばしい晴ましい芽出たものであるが、特に本年は今迄にない輝かしい洋々たる年頭だといふ感激が全国に横溢してゐるやうに思はれた。同時に又こゝには幾多の尊い犠牲に對して自ら燃を正し、身を清めて至心合掌唱題せざるを得なかつた。

見渡す限り一天雲もなく快晴の早朝六時過、酒悦立正産業報團會の全員を中心に、團員誌友の有志三三五五本部の階上御寶前に神々しい莊嚴と銘香の檀香として薫る中に包まれて、別天地の気分を感じ乍ら一同恭しく元朝の清淨な禱を捧げ且つ陣病疫英靈の御同向を尊んでから、更に改まつて産業報團會の式次に移つた。そこには先づ國民儀禮に始まり、池田會長の證書奉讀、職

部顧問のお話があり、續いて池田會長の講話と、朝日副會長の誓詞言上と、最後に全員聖壽萬歳を齊唱して朝日副會長の閉會の御挨拶があつた。詳細は別項に譲る。

全市には殆んど外形上の松飾りもなく、平素と何等の區別も認められない程ではあるが、而かも精神上には一大緊張を以て夜間は燈火の警戒管制等一絲亂れず實に氣持のよい有難い蘇々たる戦果の元且であつた。

國禱會 毎年一月七日は本團の新年國禱會である。特に今年は一入日蓮門下にあつては意義深く感ぜしめられる國禱會である故に能ふ限り丹誠を籠らせて御寶前に種々の供養、且つ恭敬、尊重し、和賀師を唱導の師として、山口、小西、本郷及び石川等の僧尼、別して日蓮宗の久保田教學部長も参列され、井上男や岩野少將等を中心にして遠く横濱からも多数参加された各團員誌友は、生憎曇天の寒い中にも嬉々として心ゆくまで立正安國の祈りと萬民快樂、殊には尊い犠牲の諸靈追福菩提に資した。法要後引續いて禱部理事は新年挨拶と、

久保田先生を御紹介された。謙讓篤信の先生は豊滿温顔を以て含著の深い御所感をお述べ下さつた。次に小林一郎先生は非常の御繁用の中を特に枉駕たまわり現時局に對する私共の心構へを各方面から警や事實をあげてお話し戴いた。又井上男爵は新春早頃から東奔西走、お席の定まる暇もなく、此日も東北よりのお歸途お立寄り下さつた俱共に祈り、而して來るべき思想文化の建設方面に於ける一大抱負をお漏し願つたことは、極めて意義深いものであつた。岩野閣下や其他二三の同志からも御感想を拜聴すべきであつたが、既に日も没しこれより警戒管制ともなつて一同の歸路を急がるゝまゝ、簡結な河合講師の閉會の辭で散會とした。

猶當日の朝、同志中村清一氏は、先頃主計少尉として北滿に活躍されつゝあつたが左の一文を寄せられたからこゝに御報告申上げる。

統一團新年會御中

其後御無音いたしました。皆々様には御揃ひ御元氣で御越年遊ばされた事と存じ

ます。私が皆様とお別れ致しましたのは七月の半頃で、丁度その直後に例の佛印進駐と資金凍結とがあり、今にも大波瀾が起りさうな様子でございました。しかしそのまゝ沈黙の戦が續いて、私共も死もすれば自分達の來てゐる意義が表はれるかと憂ひた位でしたが、十二月八日の意義深き日に遂に東亞解放ののろしが擧げられ、吾が陸海空軍は忽ちにして精戦に於ける輝かしき戦果を獲得いたしました。宣戰詔勅に於ける『天祐を保有し』の句が先づ第一線に於て證明されることとなりました。そこで私共の参りました意義も明白にあらはれ、全國民舉つて有史以來の大いなる使命に向つて邁進することになりました。しかし何といつても相手は過去數百年に亘つて世界を牛耳つて來た大國であります。これこそ大蒙古であり、又小蒙古でなければならぬものと思ひます。正に他國侵襲の豫言の適中と申すべきでせう。正法の威力にあらずんばこの國難に打撃つこと難きかと存じます。この時に當り私は皆様とお分れ

して武力國防の一局部に掌ることとなりましたが、思想國防の任務の頗る大にして而も正法の士の誇きを思ひますと皆様のお都に於ける御活動の盛大と、その効果の顯著ならんことを祈らざるを得ません。難物は熟んでゐる間は痛みも強く、益々大きくなる傾向がありますが、一度熱みきつて爆發すれば、最早一定の経過を取り治るものは治り、致命的なるものはなるものですが、今度の様に隠忍自重の極、遂に爆發して思ひもよらなかつたハワイ攻撃といふ點まで大きなメスが一度に振はれましたから、この大きな傷口が治るか治らぬかによつて、帝國の世界的使命が達せられるか、達せられぬかの分岐點であることは勿論でありませう。吾が海軍の作戦には絶対の信頼を捧げ得るとして、要するに問題は手術よりも寧ろ體力であり、そこに經濟戰と思想戰との二分野が重要となるかと存じます。そして經濟は要するに物の制限を蒙り、只その活用方法によつて天地雲泥の差があります。思想の方面は何等の制限な

く、靈と無限大との間を往來し得るものでありますから、どうしてもこの方面の絶対的な力を以て一切を活かさねばならぬと思ひます。『我日本の柱とならん』といはれた聖者の自覺を統一團から國民に與へねばならぬと存じます。どうかこの聖戰中一層の御活動を以て使命を達せられんことを御願ひ申上げます。本日偶然の機會と申しますか、人の遊んでゐる間に落着いて手紙を書くことが出来ました。新年會へ同にあへば幸と存じ皆様への御願を認めることゝ致しました。御一同様の御健康を祈りつゝ、極寒の北滿國境地帯より。中村清一

南無妙法蓮華經

寒修行會 毎年本團に於ては、寒三十日間、その神曉を期し、立正寒修行會を續行して來たが、殊に今年是一段と眞剣ならざるを得ないので、特志家は會館に來てからも水を割つて腹を行じたり、或は白衣一枚で純潔の修行を續けられた。五時半から唱題行が始まり、二人三人五人十人三十人七十

人と次第に同歩を増し六時十五分頃には満堂を歴するに到つてハタと止まり、やがて妙法華經三十講に移る順序となる。佛間十四疊と參詣室廿疊では手狭であるが、お互に膝を屈し忍び合ひつゝ、若人の大群で寒さも何處へやら、壯の奥底から和唱したあとは一汗である。かくて無量義經より妙法華經、最後の普賢行法經に迄全十巻を演誦する時、いつも其處には大雄猛尊等の偉容尊嚴たるを拜し、その大悲悲、その般若の智慧、その無限の御力用等が掌をさすやうにハツキリと味讀され、私共日嘗のあまりにも貪・瞋・痴の三毒に悩まされつゝ淺聞しい姿にあたまらなくなつて、世の三苦から超出せんとするの意が自ら探頭する、けれども人生の苦惱から離れたといふだけでは、世尊の御思召に叶つたものとは申されぬ。ではある人達のいふ通り一切法空だ、平等だと達觀したやうな態度がよいのか、否それは未だホンモノではなく、それ等から更に遠く離れて、小さい自分を忘れみ教に隨順して家の爲め、町の爲め、國の爲め、人々の爲めに竭して佛土、理想境を實

現せしめてこそ漸く佛子たり菩薩たるの光榮を得るであらう。日蓮聖人は日本人は皆菩薩だと歎賞されたのであつた、其菩薩が自己中心の日常生活を過すといふことは二乗根性に墮落したものである、即ち買物に行列して徒らに貴い時間を空費したり、有るが上にも猶貪り、又圖取引といふやうなことは日本人たるの面目を逸した三惡道の有様である。又商賣人にしても一日中僅かに二三時間店を開いて、両かまた品物を與へるやうな態度を探るが如きも、本來の日本人とはいへない。實に排佛の餘弊はこの通り世の中は圍成で、そこには人心は卒暴となり、欲しい惜しいで自己中心になり因果を辨へない畜生道、餓鬼道の生活狀態となるのである、両かもし死して惡道に墮つ、恐ろしい事である。口ばかり立派さうなことを論じて、も、その行跡を見る時に唾棄すべき者は居ないであらうか。嗚呼皇軍の戦果の赫々たるを見聞するにつけ、此後の國民がこれと並行して往ける丈けの人格品性を示してゐるや否を想ふ時、慙然たらざるを得ない。言はずんばある可らず

である。一月十五日東京日々社の社説に、「敵の非道を根絶する捷徑」と題して、我が病院船哈爾濱丸が南支那海に於て、敵潜水艇の攻撃を受けて沈没したことに就て、彼等が人道を無視し、條約を蹂躪した鬼畜ながらの行爲には、我が方としても躊躇なくこれに對する報復手段を講ずべきだ、目には目、齒には齒、これが敵國の似而非人道主義を矯正し、神を恐れざる彼等の非道を根絶せしめる捷徑である。と論ぜざるを一讀して、これが社會の木鐸を以て任ずる者の思想かと思ふ時、皇祖大神様の有難い御聖慮とあまりに隔段の甚しいに悲しく感じた所謂暴に報ゆるに暴を以てするといふ相對的行動は、聖戦の本義ではあるまい。無敵皇軍の全戦全勝といふことは、神意に協ふが故である。勿論二十年三十年の猛訓練の結果たることは全國民の涙と共に感涙し申す迄もないことであるが、その理想目的は悉くよく神意を奉ずる至誠から發してゐるものと確信する。こゝに天祐は降る、佛教の感應道である。故に大東亞の大戦は、我が物欲を満さんが爲にといふ功利的な彼

等米英の非道を根絶から是正して、無量の大陸性を拂つて我に勝かも求むる心なく、大東亞諸民族をして各其の處を得せしめ、等しく光宅せしむるにあることではあるまいか、即ち聖國の大理想を、時已に熟して是を實現せしめんとする爲の道義戦であるから、天佑神助は下るものと拜察する。かくてこそ法華經に示された「魔事あることなげん、魔及び魔民ありと雖も皆佛法を護らん」といふ深義が會通出来、立證さるゝであらう。哲學宗教なき國家は道には没落すること青史の示教する處である、今こそ我が國よりしてこの大白法の光顯さるべき當に時である。

兎に角本年の立正寒修行會は、一同悲壯な決心を以て、大詔の聖旨を拜戴しつゝ、大東亞戰爭の完勝と其建設且つ五穀豐登等大志願力に燃えつゝ勇精せる所であつた。

酒悅立正産業報國會記

十二月八日は、我が大日本帝國が、米英大國に宣戦を布告した日である。八日未明ラヂオで米英宣戦の御詔勅を聴いた時は、

いよ／＼やつたなといふ悦び、それに伴ふ緊張、責任といふ複雑な、一種云ひ知れない感情が、有難い何か知ら大きな光のやうなものとなつてひた／＼と身内に感じられ奮ひ起つやうな興奮を感じない譯には行かなかつた。

しかも起ちえるや皇軍は、直ちに彼等を押し切つて多大の戦果を挙げた。ラヂオを通してこの大戦果のニュースを聴いた時に誰か喜びに奮ひ戦かたない者があつたらうか我々の血は多年の宿願が、たゞこの一瞬に成就せられたかのやうに歡喜し、勇躍した我等は、何十年間唯だこの一瞬を待つてゐたのだ。これがニュースを聴いた時に、直ちに誰もが感じた感涙であつたらう。

十二月八日を我々には外の意味で記憶しなければならぬ。この日は實に釋尊成道の聖日である。この日を以て、神國日本が東亞永遠の平和の爲めに、米英を向ふに廻して起ち立つたといふのも奇しき因縁ではないか。我が大日本帝國は、東亞永遠の平和の爲めに、東亞民族の發展、幸福の爲めに、侵略厭なき米英の非道義なものを指

摘訂正した。我々は神國大日本帝國のこの大道義を銘記しなければいけない。

我々の事務所の壁には、世界地圖が貼られてある。我々は興奮をもつて、毎日占領地域、攻撃區域に對して、日章旗と爆彈の印を丹念に貼りつけて行つた。今では南の海一帯に日章旗が輝いてゐる。實に美しい地圖が出来上つた。我々は、この美しい地圖を作つて呉れた海陸空の皇軍將兵に心からなる感謝を、身を清め、心を静めて朝々に御寶前に祈願した。我々は御寶前に傾いて、轉輪聖王としての道義日本の限りない興隆發展の聖なる思ひを證にしてゐる。

我々は、皇紀二千六百二年の元旦を期して、有難い米英兩國に對する詔書の奉讀式を統一國で舉行した。詔書奉讀式舉行に對しては、十二月十三日付を以て東京産業報國會長より通牒を受けたが、我々は右の通牒が無かつたとしても、昭和十七年一月一日の第三十回の興亞奉公日には、この有難い詔書の奉讀式を舉行したのであらう。一月一日以後の發表で分つたが、一日の興亞奉公日が八日に改つたのも、我々は二應義

金五圓也	橫濱	日山	三郎
金貳圓五拾錢也	同	川島	只亮
金貳圓貳拾錢也	中津	有田	連殿
金參圓也	東京	石川	成殿
金拾五圓也	神奈川	相良	直一殿
金貳圓貳拾錢也	基隆	原光	太郎殿
金五圓也	福島	夏谷	江南殿
金貳圓貳拾錢也	千葉縣	齊藤	昭行殿
金貳圓貳拾錢也	岩手縣	伊澤	春三郎殿
金貳圓五拾錢也	新東京	長澤	信一殿
金拾五圓也	東京	久保	正文殿
金壹圓貳拾錢也	福岡縣	大久保	久市殿
金貳拾貳圓貳拾錢也	北支	種村	五郎殿
金拾圓也	東京	野口	英司殿
金拾圓也	熊本	内山	秀作殿
金貳圓五拾錢也	大阪	東峰	太郎殿
金貳圓五拾錢也	橫濱	大内	正工殿
金貳圓五拾錢也	基隆	高橋	日應殿
金拾圓也	北京	高部	登殿

右雜有入帳仕候也

(以是領收證代用)

財團法人統一團會計

謹告

本部 第拾周年記念教化大會

開館 日時 二月十一日午後二時開筵

本尊意識確立 磯部滿事氏
發展ト反省 小林一郎氏

其他

時局に鑑み右の通り第一義教化大會
開催可仕此段謹告候也

財團 統一團

本多日生上人著書特價提供	特價	金壹圓九拾錢
聖語錄 改版 送料共	特價	金貳圓五拾錢
法華經要義 賜天覽	同	金壹圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	金貳圓九拾錢
日蓮主義精要	同	金貳圓九拾錢
法華經要品	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	金五圓
磯部滿事譯	同	
本多日生上人	送料共	金壹圓七拾錢
勤行作法	同	金拾錢
佛教の心髓	同	金壹圓
河合彰明著	同	
皇道と日蓮主義	送料共	金壹圓

東京市小石川區普羽町六ノ十七
財團 統一團 出版部
振替東京九四二〇六番
香〇二四九東京替振

統一團 定價一統
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

○御申込ハ總テ前金ノ事
○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
○御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共ニ御通
知ノ事

昭和十七年一月二十七日印刷納本
昭和十七年二月一日發行
(第五百六十三號)

東京市小石川區普羽町六ノ十七
編輯兼 磯部 滿 事
發行人 磯部 田 英 二
印刷所 東京市小石川區普羽町八ノ十一
東京市小石川區普羽町八ノ十一
電話牛込六九六六番

發行所 財團 統一團
東京市小石川區普羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇六番

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

目 次

三教の特色と其調和(下).....	本多日生
法國冥合の意義.....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(九).....	河合陟明
年頭の感話.....	久保田正文
日什大正師行狀記.....	榎本正
記 事	
○本部團報	
○福島支部報	
○産報會記	
○入帳報告	

第 四 十 七 年 三 月 號



統

財 團 法

統

一 團

發 行